

『韓国語教育研究』（第4号）別刷

ISSN 2186-2044

【寄稿論文】

日韓の近代史に見る異文化理解の礎

呉 英元

日本韓国語教育学会

2014年9月

日韓の近代史に見る異文化理解の礎

呉 英元

この文章は、2014年の5月、「日韓女性親善協会」の総会で講演した内容を基にまとめたものである。日韓女性親善協会は、1978年5月に日本の相場雪香初代会長と韓国の朴貞子初代会長を中心とし、「女性の手により、日韓両国の理解を深め、友好を具体的にすすめ、親善の地の塩になりたい」という高い理念により設立され、2012年9月、森山眞弓会長と李堯植会長の献身的な活動により、団体名称を「特定非営利活動法人日韓女性親善協会」として法人設立認定と共に躍進してきた団体で、現在、森山眞弓名誉会長と山東昭子名誉会長、狩野安会長の協力により、日韓女性親善の理念に向かって活躍している。講演の趣旨は「日韓親善」をキーワードに、苦しかった近代において両国のために活躍した人々の歩みを顧みながら「真の親善」を考えてみようとしたものである。来年は、日韓国交正常化50周年を迎える。両国の冷え切った厳しい情勢に置かれている日韓関係の改善に向けて、最近、未来志向で大局的な観点から両国関係を進めていく動きが現れている。教壇に立つ教育者もこれからの新しい50年を見渡し、未来に向かって両国の異文化を理解し、親善の先駆的志で教育に臨んでくれることを願うのである。

1. はじめに

私は、大学で「日韓比較文学文化ゼミ」をはじめ、文学、文化、歴史などの講義を持ちながら、日韓の最も辛かった近代史において、日本と韓国の両国のために働いた貴い人物に出会う度、感動と刺激を覚えざるを得なかった。ここに、近代の最も暗かった時期において日韓親善のために活躍し、韓国の民衆に尊敬されている柳宗悦・浅川巧・李方子妃殿下を中心に、彼らは如何に活動し、両国のために身を捧げ、歩んできたかを顧みながら、崇高な精神に基づく真の親善と行いを通して、歴史の中にみる日韓両国の異文化理解の礎とする。

2. 柳宗悦と兼子

2.1. 柳宗悦と朝鮮

柳宗悦は、1889年(明治22.3.21)に東京都港区で生まれ、日本を代表する思想家・宗教哲学者・民芸家としての活動をし、1961年(昭和36.5.3)に72歳で死去した。

1910年、学習院高等科卒業の頃に文芸雑誌『白樺』の創刊に参加。宗教哲学や西洋近代美術などに深い関心を持っていた柳は、1913年に東京帝国大学哲学科を卒業後、1914年(大正3.2)、25歳の時に声楽家中島兼子と結婚して千葉県我孫子へ転居し、手賀沼のほとりで約7年間、志賀直哉、武者小路実篤、バーナード・リーチと共に創造及び芸術活動を展開した。同じく1914年、韓国で小学校教師をしていた浅川伯教が朝鮮陶磁器を手土産に柳を訪ねたところ、その美しさに魅了された柳は、1916年以降たびたび朝鮮半島へ渡り、朝鮮工芸に親しむようになる。

朝鮮陶磁器の美しさに魅了された柳は、朝鮮の人々に敬愛の心を寄せる一方、無名の職人が作る民衆の日常品の美に眼を開かれ、当時植民地だった朝鮮に対する日本政府の施策を批判し、1921年、日本で最初の「朝鮮民族美術展覧会」を開催、1924年にはソウルに「朝鮮民族美術館」を開設し、日本各地の手仕事を調査・蒐集する中で、1925年に民衆的工芸品の美を称揚するために「民藝」の新語を作り、民芸運動を本格的に始動させていく。

1936年、日本民芸館が開設されると初代館長に就任、以後1961年に72年の生涯を閉じるまで、ここを拠点に、数々の展覧会や各地への工芸調査や蒐集の旅、旺盛な執筆活動などを展開する。晩年には、仏教の他力本願の思想に基づく独創的な仏教美学を提唱し、1957年には文化功労者に選ばれる。

2.2 朝鮮民芸の発見

柳宗悦が朝鮮工芸の美に惹かれ始めたのは、大学在学中だったといわれている。その後も朝鮮の美術工芸品に対する愛着はますます強まっていき、初めて朝鮮を訪れて、工芸品を持ち帰った柳は朝鮮の美への愛着を吐露する「朝鮮の

友に贈る書」を1920年4月10日に書いている。その冒頭に「私の知れる、又は見知らぬ多くの朝鮮の友に、心からのこの書翰を贈る。」とあって、本文の初めには「私はこの頃殆ど朝鮮の事にのみ心を奪われている…」と始まる。次は、最初の部分の朝鮮語訳が同月『東亜日報』に連載された一説を紹介する。

「朝鮮の友に贈る書」

「四年前私が朝鮮を訪ねて以来、只の一時でもそれ等の作品の何れかを私の室から離れた事がない。それはいつも私に話し掛けたい様に見える。私はそれを冷たい暗い場所に長くしまうに忍び得ない。私がそれを机の上に置く時、それは悦んでくれるかの様に思う。それはいつも私を待っていてくれる。私はそれに近づかないわけにはゆかぬ。ましてその美しい姿は私の心を引きつけている。それを眺めそれを手に按く時、私は心と心とが触れ合う想いがある。それはいつも私の情愛の友だ。私も亦彼等の親しい友だ。それが淋しく悲しい姿に見える時、私も淋しく悲しい想いに襲われてくる。それが私の傍に在って悦ぶ様に思える時、私も心に嬉しく思う。かくして二人はいつも共に悲しみや悦びの世界に歩む。」

〔柳宗悦集〕「朝鮮の友に贈る書」1920.4.10 我孫子町にて

柳宗悦は生涯で21回ほど朝鮮を旅行している。最初の訪問は1915年、妹の千枝子が結婚してソウル(当時の京城)に行っていたのを訪ねる。1914年の秋、朝鮮から浅川伯教が我孫子の柳家に訪ねていて、翌年伯教と弟の巧が兄弟で柳を訪問している。浅川兄弟との交流のなかで、朝鮮の美術工芸品に関する意見交換が行われ、柳が朝鮮を初訪問した時には、浅川兄弟が案内し朝鮮の美術工芸を直接見聞することになる。

2.3 朝鮮に惹かれる心

第一次世界大戦終結後の1919年は、世界の各地で植民地独立運動が盛り上がった年である。1910年「日韓併合条約」以降植民地にした朝鮮の民族独立運動に直面する。1919年2月8日、日本留学中の朝鮮人学生たちが神田の朝鮮キリ

スト教会館 (YMCA) で集会をもち「独立宣言」を発表した。この動きが朝鮮本土に伝わって、宗教家を中心とした 33 名の代表が署名し、3 月 1 日、ソウルのパゴダ公園 (現在のタプコル公園) に集まって「独立宣言」を発表して、「大韓独立万歳」を叫びながら街に出た。この動きが全土に広がり朝鮮を揺るがす大運動になり、これを「三・一独立運動」と呼んでいる。

この「三・一独立運動」を終始見つめた日本人、柳宗悦は、「朝鮮人を想ふ」と題する文章を書いて 1919 年 5 月 20 日から 24 日にかけて『読売新聞』に連載発表される。柳はそれについて「誰も不幸な朝鮮の人々を公に弁護する人がないのを見て、急ぎ書いたのである。これは朝鮮に就いて書いた最初のものであった。」と、後に説明している。翌年 4 月 12 日よりその朝鮮語訳が『東亜日報』に掲載された。その文章を抜粋してここに紹介する。

「朝鮮人を想ふ」

「自分は朝鮮に就いて十分な予備知識を持っているわけではない。僅かに所有する根拠があれば、それは凡そ 1 ヶ月の間朝鮮の各地を巡歴した事と、旅立つ前、2, 3 の朝鮮史を繙いた事と、予てからその国の芸術に厚い欽慕の情を持っているこの三つの事実だけである。」—中略—「今度不幸な出来事が起ったため、遂にその期が来て私にこの筆を執らせたのである。

私は今度の出来事に就いて少なからず心を引かされている。特に日本の識者が如何なる態度で如何なる考えを述べるかを注意深く見守っていた。併しその結果朝鮮に就いて経験あり知識ある人々の思想が殆ど何等の賢さもなく深みもなく又温かみもないのを知って、私は朝鮮人のために屢々涙ぐんだ。」—中略— 私は屢々想うのであるが、或国の者が他国を理解する最も深い道は、科学や政治上の知識ではなく、宗教や芸術的な内面の理解であると思う。言い換えれば経済や法律の知識が吾々を他の国の心へ導くのではなくして、純な愛情に基く理解が最も深くその国を内より味はしめるのであると考えている。私は日本に於ての小泉八雲 (Lafcadio Heam) の場合の如きをその適例であると思っている。—中略— 朝鮮の人々よ、よし私の国の識者の凡てが御身等を罵り、また御身

等を苦しめる事があっても、彼等の中にこの一文を草した者のいる事を知ってほしい。否、私のみならず、私の愛する凡ての私の知友は同じ愛情を御身等を感じている事を知ってほしい。」（「朝鮮人を想ふ」1919.5.11）

これは、柳宗悦が朝鮮について書いた最初のもので、その信念をつらぬくために抑圧された民族に同情を寄せる文章であった。この記事は、8月に英訳されて『The Japan Advertiser』に掲載され、翌1920年の4月に朝鮮人記者・廉相渉ヨムサンソプ (염상섭)による朝鮮語訳が『東亜日報』に掲載されることによって、朝鮮で大反響が起きたのである。

2.4 朝鮮建築のために

日韓併合から16年目の1926年、朝鮮における日本の植民地体制が着々と強固なものになって行った。植民地支配の象徴である朝鮮総督府の新庁舎は、10年の歳月と総工費6百40万という巨額を投じて、この年の1月6日に竣工した。

建面積延べ3万3千平方メートル、総5階建て、総大理石造り、中央正面に一段と高い塔がそびえ、ドーム型大蓋の上にさらなる鋭鋒が天を突いている。設計はゲオルグ・ランディというドイツ人技師と日本人技師野村一郎が青写真をひき、清水建設の前身である清水組が工事を請け負ったのである。建材はすべて金剛山地で産する朝鮮の大理石でまかなわれた。

総督府が新庁舎を建てる時、建設場所は李氏朝鮮王朝500年の象徴である正宮キョンボクン (경복궁)を選んだのだ。景福宮は李王家と祖国を敬慕する朝鮮民族の心の象徴でもあった。それが正宮の真ん前に、しかも正門クァンファムン (광화문)と正殿の勤政殿クンジョン (근정전)の間に巨大な建造物が割り込んでくれば景福宮の殿舎のすべてが覆い隠されてしまう。また、正門である光化門と正殿である勤政殿を南北一直線に結ぶ風水地理学説上の気脈も断ち切られてしまう。総督府の意図もそれらにあって、気脈を断ち切るためのその場所に総督府を建てるには邪魔である光化門を取り壊すことになった。それに反対して柳宗悦は、1922年『改造』雑誌9月号に次のような文章を発表する。

「失はれんとする一朝鮮建築のために」

「この一篇を公開すべき時期が私に熟してきた様に思う。将に行われようとしている東洋古建築の無益な破壊に対して、私は今胸を絞められる想いを感じている。朝鮮の主府京城に景福宮を訪ねられた事のない方々には、その王宮の正門であるあの壮大な光化門が取り毀される事に就いて、恐らく何等の神経をも動かす事がないかもしれぬ。然し私は凡ての読者が東洋を愛し芸術を愛する心の所有者である事を信じたい。—中略— 之は失われてならぬ一つの芸術の、失はれんとする運命に対する追惜の文字である。そうして特にその作者である民族が、目前にその破壊を余儀なくされている事に対する私の淋しい感情の披露である。—中略— 必ずや日本の凡ての者はこの無謀な所置に憤りを感じるにちがいない。」
(これはその冒頭の一文章である)

「光化門よ、光化門よ、お前の命がもう旦夕に迫ろうとしている。お前がかつてこの世にいたという記憶が、冷たい忘却の中に葬り去られようとしている。どうしたらいいのであるか。—中略— この事を考へて胸を痛めている人は多いにちがいない。だけれども誰もお前を救ける事は出来ないのだ。不幸にも助け得る人はお前の事を悲しんでいる人ではないのだ。—中略— おお、光化門よ、光化門よ、雄大なる哉汝の姿。」

(「失はれんとする一朝鮮建築のために」1922.7.4 東京にて)

2.5 柳兼子と音楽会

アルトの声楽家柳兼子は、1892年(明治25)に東京で生まれ、18から87歳まで演奏活動を続け、その間日本歌曲の演奏に力を注ぎ、独特の唱法を確立し、1984年(昭和59.6.1)、92歳の生涯を閉じた。

音楽の美しさとは、表面的なものではなく、音楽の心というものが滲み出るもので、兼子は、魂の叫びとして歌った、天才というより努力家で、人生のすべてがそこにある魂の音楽家と評されている。

1908年3月、東京音楽学校予科に入学(現、東京芸術大学)した16歳の兼子

は、一番年少で、学校に入って間もなく、将来夫となる柳宗悦と知り合ったのが、兼子 18 歳、柳宗悦が 21 歳の時であった。思想的には大変早熟であった宗悦は、最年少にしてすでに白樺同人の中心人物の一人になっていたのだ。純粋な憧れを持って約 4 年間、彼女に恋文を何百通となく書き続けた宗悦は、初め、兼子の歌に感銘することによって心から彼女を慕い始めたそうだ。宗悦は彼女の芸術家としての行為と家庭人としての女の勤めが両立することの可能性に確信をもって述べ、宗悦の兼子への思慕は思想にこの上ない活力を与えると同時に、兼子は宗悦に慕われることによってその歌に一段と潤いのある豊かさを増したのであると言っている。

結婚したのは、兼子が 22 歳、宗悦が 25 歳の時で、兼子 23 歳の時、長男宗理が生れ、25 歳の時、次男宗玄がうまれた。

1910 年、日本は朝鮮を植民地として統治し、宗悦は身の危険を顧みず、軍国主義に反対し、破壊されつつある朝鮮文化の擁護に文筆をもって立ち上がり、移築運動を起こした宗悦の「失われんとする一朝鮮建築のために」の文章によって、貴重な建築文化財である「光化門」は、破壊されず移築保存されたのである。

妻である兼子は、夫の宗悦に従って度々朝鮮を訪れ、夫の朝鮮のための運動に協力し、精力的に幾度となく音楽会を開催して、その収入のすべてを朝鮮のために捧げたのである。殊に朝鮮民族美術館（チブキョンドン 緝敬堂・집경당）を京城（現ソウル）に建て、朝鮮の人々自身に朝鮮文化の誇りを持ってもらうように努めたのだ。この美術館建設は、その後の 1936 年 10 月「日本民藝館」設立の先駆けとなったのである。（蒐集品は現在韓国の国立中央博物館に保存されている）

1920 年 4 月、柳夫妻は朝鮮を訪れ、滞在 20 日足らずの間、宗悦は 4 度の講演を開き、兼子は滞在 10 日の間、7 度の音楽会を開いて、「朝鮮民族美術館」設立のために努めたのである。柳夫妻の働きは、狭い意味でのナショナリズムを超え、アジアの未来を感じさせる。そういう意志と生き方に感動された韓国人もいて、柳がソウルで講演のために演壇に近づこうとした時のことを「彼の朝鮮行」の中に、

「その時ふと彼の肩を静かに抑えて彼の耳に早く囁いた朝鮮人があった。
「今晚は貴方がたにまで警察の監視がひどい様です。速記者二人まで来
ている位ですから、どうか注意して話してください。貴方の御身の上に
若しもの事が起ってはすみませんから。」

公衆の中で突然に彼に囁いたこの言葉は、どれほど深い感激を彼の心に
起したであろう。彼は見知らぬ人からのこの温かい声を聞いた時、ど
う彼の気持ちを表してよいかを知らなかった。彼は夢中で演壇に立つ
た。」

と、ある。また、我孫子に住んでいたころ、「舞踊で有名だった崔承喜(최승희)が魚を仕込んだキムチを持って来たが、その味は天下一品だった。」ともあり、兼子は、キムチの作り方を習って、自ら漬けて美味しく食べたとも書いてあるのを見ると大らかで温かい心が伝わって来るようである。

3. 浅川伯教と巧兄弟

3.1 浅川伯教と朝鮮民芸

兄伯教は、1884年(明治17.8.4)、山梨県で生まれ、1906年に山梨師範学校を卒業して、山梨の小学校訓導として教壇に立っていたが、美術や文学を好む熱心なキリスト教徒で、朝鮮の美に魅せられ、陶磁器や朝鮮美術への憧れや関心が一家をあげての朝鮮行きの決意となり、日韓併合3年後の1913年に朝鮮に渡って、京城(ソウル)の尋常小学校の教員として赴任した。教職に勤めながら、美術や文学の研究に没頭し、柳宗悦や弟巧とともに「朝鮮民族美術館」を設立、伯教が制作した作品の入選や朝鮮の陶磁に心を引かれて各地を巡り、朝鮮陶磁史研究に情熱を傾け、朝鮮陶磁史の執筆などに励んだ。1946年、日本に帰国し、1964年(昭和39.1.14)、80歳で死去した。

3.2 浅川巧の朝鮮の土となった日本人

弟の浅川巧は、1891年(明治24.1.15)に山梨県で生まれ、農林学校を出て、兄

伯教を慕って1914年(大正3)、植民地であった朝鮮に渡り、朝鮮総督府の林業試験場に勤めた。

浅川巧は、生れる前に父を亡くして祖父の慈愛を受けて育ち、七つ違いの兄伯教を父代わりに慕って、キリスト教に入信したのも朝鮮へ渡ったのも兄の影響であった。

子供の頃から自然を愛した巧は、朝鮮林業試験所に勤めながら、養苗の種子を採集するために朝鮮の各地を訪ね、朝鮮の人と暮しに親しんでいった。そして、李朝白磁と朝鮮人に惹かれるようになって朝鮮を愛し、朝鮮語を話し、朝鮮服を着、朝鮮の家具を置いて生活するほど、朝鮮人になりたかった日本人であった。それも同情などではなく、心の底から朝鮮が好きになったからだと言っている。

日本支配下、殆どの日本人は、朝鮮人を蔑視していたが、朝鮮の言葉を話し、朝鮮の民族衣装パジ・チョゴリを着て、朝鮮人と同じように暮らしていれば、電車の中で日本人は朝鮮人に「ヨボ、どけ」といって、席を譲らせたりする。浅川巧は、朝鮮人と同じ格好をしていたので、日本人から同じことをされても、「私は日本人だ」ということもなく、静かに席を譲ったらしい。また、誰もが値切って買う行商人の青物を隣の家で値切られた分を浅川巧が代わりに高く買うなどのエピソードも多く、朝鮮民衆から親しまれ、朝鮮人に真心から愛されたのであった。

浅川巧は、一生朝鮮の林業試験場に勤務して朝鮮人と交わり、はげ山の多い朝鮮の山を緑化するために土壤に合った樹木の研究と育成に努めた。木を植える方法などを調査研究しながら仕事の合間に、朝鮮の各地を回って工芸品の価値を発掘する。民間の忘れられている工芸品の名称を調べたり、地方の陶磁器の窯跡を兄と一緒に探索したりして、柳宗悦と共に朝鮮民族美術館を設立する。1924年に景福宮(경복궁)に開館された「朝鮮民族美術館」の鍵を持ち、運営と案内役を務めた。

植民地支配の朝鮮の地に生き、乏しい給料から人知れずに仕事場の朝鮮人子弟に学資を援助したりして、朝鮮と朝鮮文化と朝鮮人を愛し、朝鮮人からも愛されて、生涯を送った。

「朝鮮民族美術館」の運営と「朝鮮工芸会」の活動に先頭に立って活躍した彼は、1931年(昭和6)、「植木日(4月5日)」の記念行事準備中、4月2日、急性肺炎のため、40歳の若さで人生を終えた。朝鮮式のお葬式で多くの朝鮮人に惜しまれながら、朝鮮人墓地にただひとり葬られ、朝鮮の土となった日本人である。

病床にて朝鮮民芸に対する原稿を書いていた巧は、亡くなる直前、「責任がある…」という言葉を繰り返したと言う。朝鮮民芸の研究の成果は著書『朝鮮の膳』『朝鮮陶磁器名考』の二冊にまとめられた。

兄とはいつまでも仲がよく、互いに尊敬しあい研究の手助けをした巧について、柳宗悦は、「あんなに朝鮮のことを内からわかっていた人を私は他に知らない。ほんとうに朝鮮を愛し朝鮮人を愛した。そうしてほんとうに朝鮮人からも愛されたのである」と讃えている。

里門里(이문리)の共同墓地にあった墓が1942年、忘憂里(망우리)に移葬され、その時、彼は端正に朝鮮服を着て丸いロイド眼鏡を掛けた当初の姿そのままであったと言う。1966年に墓碑を建て、墓石には「慎んで遺徳を褒めたたえご冥福をお祈りいたします」と書いてある。1995年から3年かけて墓の大整備工事を行い、1997年、日韓共同追慕祭を捧げた。碑文に「韓国の山と民芸を愛し、韓国人の心の中に生きて行った日本人、ここに韓国の土になる」と、刻まれている。

4. 李垠英親王と李方子妃

4.1 李垠英親王 (이운 영친왕・1897~1970)

李王垠殿下は、大韓帝国第26代高宗皇帝ゴジョンの第三王子として1897年10月20日に誕生され、4歳の時に英親王(영친왕)と命名された。英親王の父君、高宗は12歳にして即位せられ、1907年7月19日、皇帝譲位するまで、在位43年に及んだ、李王朝末期には、親日・親露・親清の三派が対立し、英親王は生まれながらにして苦難の運命を背負われていたのである。(大韓帝国は、第26代王高宗の時の1897年10月から1910年の日韓併合までの間使用していた国号)

李垠殿下は、朝鮮王朝500年の最後の皇太子として生まれた運命のために、あらゆる辛酸をなめられてから、1970年5月1日、73歳を一期に世を去られた

英親王。その方の生涯は、旧王室の悲劇をそのまま象徴するように、孤独と忍従の一生であった。

1907年に皇太子に冊封され、同年12月に、旧韓末に日本の伊藤博文統監によって11歳（満10歳）の時、日本に連れられて来て、日本の教育を受けた。

1910年、日韓併合により皇帝が廃止され李王となり、1926年に第27代王純宗スンジョンが亡くなると李王家を継承して李王垠殿下となった。

日本では、日本陸士・陸大を卒業、陸軍中將を経て、1963年に還国し、73歳にソウルで逝去した。

4.2 李方子妃（イバンジャピ 이방자비・1901～1989）

李方子妃殿下は、李王朝最後の皇太子妃で、本名は、梨本宮方子である。1901年、当時の皇族・梨本宮家の第一皇女として生まれ、1920年18歳の時、日本が韓国を植民地化していて、当時人質のような形で日本に留学していた李王朝28代王世子李垠殿下と勅命により「日韓融和」という美名のもとで政略結婚をさせられ、その後、結婚挨拶として訪朝し、間もなく長男の原因不明の死を遂げるなど数奇な人生を歩むことになる。

1963年病状の李垠殿下とともに韓国に渡って韓国籍をえたが1970年殿下が亡くなり、李方子女史は、その後も韓国にとどまって障害児の訓練施設「明暉園ミンフイオン」を設立するなど、社会福祉に情熱を傾ける。1989年87歳でソウルにて死去し、波乱の人生を終えた。（李王垠と方子妃の間に第二子李玖（1931.12.9～2005.7.16）を持つ）

5. 結び

暗闇の夜空で星は輝き、暗黒の時代にこそ義人や偉人が現れると言う。日韓の人々の心の中に生き、尊敬される人、心の底から湧き出る慈愛と温かい人情に溢れ愛し、愛される人、苦難の時代の悲運に生まれ、日韓両国のために忍耐を持って従順し、堪え忍び、貴い礎となった人、彼らは、歴史の中に葬られて消えていくのではなく、いつまでも両国の人々の心の中に生き生きと蘇ってく

る、日韓の夜空に輝く星である。

李方子妃は、社会福祉に情熱を注いで、その資金づくりのためにしばしば来日し、チャリティー展などを開いたときにお会いしたことやソウルのロッテ・デパートにある方子妃ご自身の七宝焼作品店でお会いした時のチマチョゴリ姿が懐かしい。柳宗悦と兼子、浅川伯教と巧兄弟、李垠英親王と方子妃殿下のような貴い人がいる限り、日韓の未来は希望がある。

歴史を通して学び、異国の文化を理解し愛し合う心で、今を生きる人としての使命に、未来のための正しい教育があるであろう。

参考文献・資料

『柳宗悦集』「朝鮮の友に贈る書」鶴見俊輔編集 近代日本思想大系 24 筑波書房 (1975)

『柳宗悦集』「朝鮮人を想う」同上

『柳宗悦集』「失われんとする一朝鮮建築のために」同上

『回想の柳宗悦』 蝦名則編 八潮書店 (1979)

『朝鮮とその芸術』柳宗悦選集 第四巻 日本民芸協会編集 春秋社 (1978)

『柳宗悦』 鶴見俊輔 平凡社選書 48 (1977)

『白樺便り』「白樺文学館」より、4. 遠のアルト柳兼子、126. 柳宗悦と朝鮮、183. 李朝と柳宗悦、205. 民藝と私～柳宗悦と浅川兄弟、等

『朝鮮の土になった日本人 浅川巧の生涯』 高崎宗司 草風館 (1982)

『日韓交流のさきがけ—浅川巧』 梶村彩 揺籃社 (2004) (中学校2年生、第6回日本自費出版文化賞入選作)

『浅川伯教と巧』 浅川伯教・巧兄弟を偲ぶ会編 (山梨県浅川伯教・巧兄弟資料館)

『ひびきあう心』 私塾・清里銀河塾編 (2006)

『英親王李垠伝』 李王朝最後の皇太子 李王垠伝記刊行会編著 共栄書房 (1978)

『朝鮮王朝最後の皇太子妃』 本田節子 文藝春秋 (1988)

『三代の天皇と私』 梨本の伊都子 講談社 (1976)

『流れのままに』 李方子 啓佑社 (1984)

(二松学舎大学 名誉教授)

韓国語教育研究（第4号）

2014年9月15日 発行

発行者 姜 奉植
発行所 日本韓国語教育学会
〒161-853 東京都新宿区中落合4-31-1
目白大学外国語学部韓国語学科
編集者 『韓国語教育研究』編集委員会
文慶喆、柳朱燕、金恵鎮、金鉉哲、宋貞熹
印刷所 株式会社 仙台共同印刷